



くっ...

くっくっ...  
くっくっ...

くっくっくっ...

くっくっくっ...

「ぐらー、これっ はずれな、いつー!。」

アイシヤは自分の手足に絡みつく敵の遠隔操作武器に  
苦戦する、絡みついた触手は  
アイシヤの身体を無理矢理宙に浮かし、  
彼女の手足を折り畳み、包み込もうとする――。



今回アイシヤは  
普段の面子と違うメンバーとの任務に赴いていた。

お相手はクラス3のマーゴハンター3人で、  
リーダー的ポジションの娘は、  
親がリベラテイオに関わる裕福な家の娘らしい、

少々問題があるとの噂を聞いていたが、  
少なくともアイシヤに対して失礼な態度を  
取ったりするような事は無く、  
つつがなく任務は進んでいった。

潜入した建物のある部屋に入った時である、  
そこには1人の女性がいた。

その女の左肩に装備された盾から何か飛び出す。  
問答無用の先制攻撃に回避しようとしたアイシヤだが、  
その攻撃速度に3人は反応出来ないでいた。

アイシヤの能力ならば回避は容易だったが、  
彼女は3人を庇うように  
飛び出したものの突撃をその身で受けた。



手足を包む膜触手を焼き払おうと力を込めるアイシヤ、  
だがアニマウエボンが反応しない、  
ならばと腰のメデューザで空中移動しようとした時、  
その機能が放ちそれがメデューザに命中すると  
その機能も停止してしまう。

（……？、コイツ、  
アニマウエボンだけを狙い撃ちしてきた……！）

反撃の手段を奪われた  
アイシヤの手足に絡みつく触手から肉の膜が  
溢れだしドンドン覆われていく……。

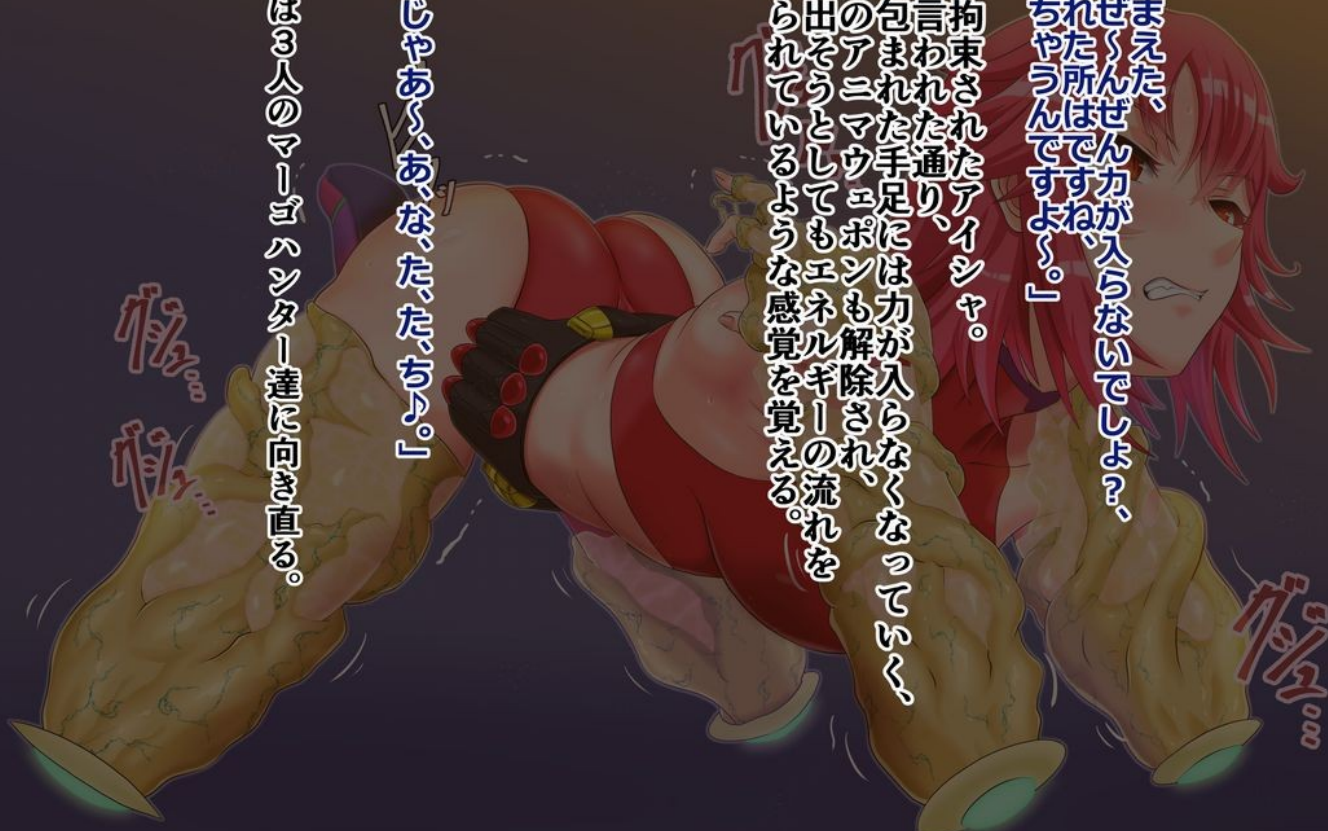


「ケヒヒっ、捕まえた、  
どう？手足にせよんかが入らないでしょ？、  
その子に包まれた所はですすね。」  
力が封印されちゃうんですよ。」

宙に拘束されたアイシヤ。  
女に言われた通り、アイシヤ。  
膜に包まれた手足には力が入らなくなっていく、  
手足のアニマエポシも解除され、  
呼び出そうとしてもエネルギーの流れを  
止められていくような感覚を覚える。

「さっさとそれじゃあ、あ、な、た、た、ち。」

女は3人のマーゴハンター達に向き直る。



「ひっ！…あ、あなた、もしかしてアンジー、なの？。」

「あらよく覚えてたわね、こんなに変わったのだね。」

頼りのアイシヤが捕らわれ、  
3人は壁の端で身を寄せ合い恐怖に震えている、  
だがリーダーの娘は女に面識があるようだった。

「あ、あなた、確か、  
マ『ゴハンター』を辞めたハズでしょ！？、なんで！？」

「そつよく、辞めたわよく、あなた達の望み通りだね、  
それと、今の私はエラピュリス、そつよく名前なのよ。」



彼女達の会話でアイシャはある事に思い至った

「あなた…まさかトライゾン…?」

マーゴハンターの中には  
様々な理由によりマーゴハンターを辞める者がいる。

しかしマーゴハンターを辞める事に対して罰則は無い、  
ただ厳格な守秘義務契約をさせられるくらいである。

だが辞めたマーゴハンターの中には  
その契約を守るところかマーゴと関わりを持ち  
人類とマーゴハンターの敵となる者が存在する。

そういった者は裏切者

「トライゾン」と呼ばれ、

マーゴ同様かそれ以上の危険人物として扱われ、  
討伐対象となる。



「ケヒヒヒ、そうよ、アイシヤ・エプタさん。  
…あら？、やっぱり驚かないのね。」

元マーゴハンターであれば  
自分の名前を知っている者もいるだろう、  
本人としては悪目立ちしたくは無いのだが、  
クラス5というのは良くも悪くも目立つのだ。

「トライゼンは討伐対象なのは知ってる。」

「ん、勿論。」

「じゃあ、クラス4以上のマーゴハンターが請負人になれば  
罪が許されないまでも討伐対象じゃなくなるのは？」



「えっ、そうなの？  
…でもそれって、あなたにもリスクがあるんじゃないかって。」

トライズンは討伐対象だが、  
クラス4以上のマーゴハンターが、  
危険人物ではないと保証する事で  
討伐からは免れる場合がある。

当然それまでに行った罪は帳消しには出来ないが  
命を奪われる事は無い。

「まあね、でもあなたも命を狙われ続けるのは嫌でしょ？。  
勿論してきた事を無しには出来ないよ。」

あなたがどれだけの事をしたかは私は知らないけど、  
それはちゃんと背負うべきだよ、

だから、ここであなたが変わろうと思っただけなら…  
私が手を貸してあげる。」

「はああく、やつぱりアイシヤさんはかつこいらですね、  
叶うならあなたの方に師事したかったです。」

「流石に弟子入り自体は難しいかもしれないけど、  
一緒に仕事は出来るようにはなるかもよ。」

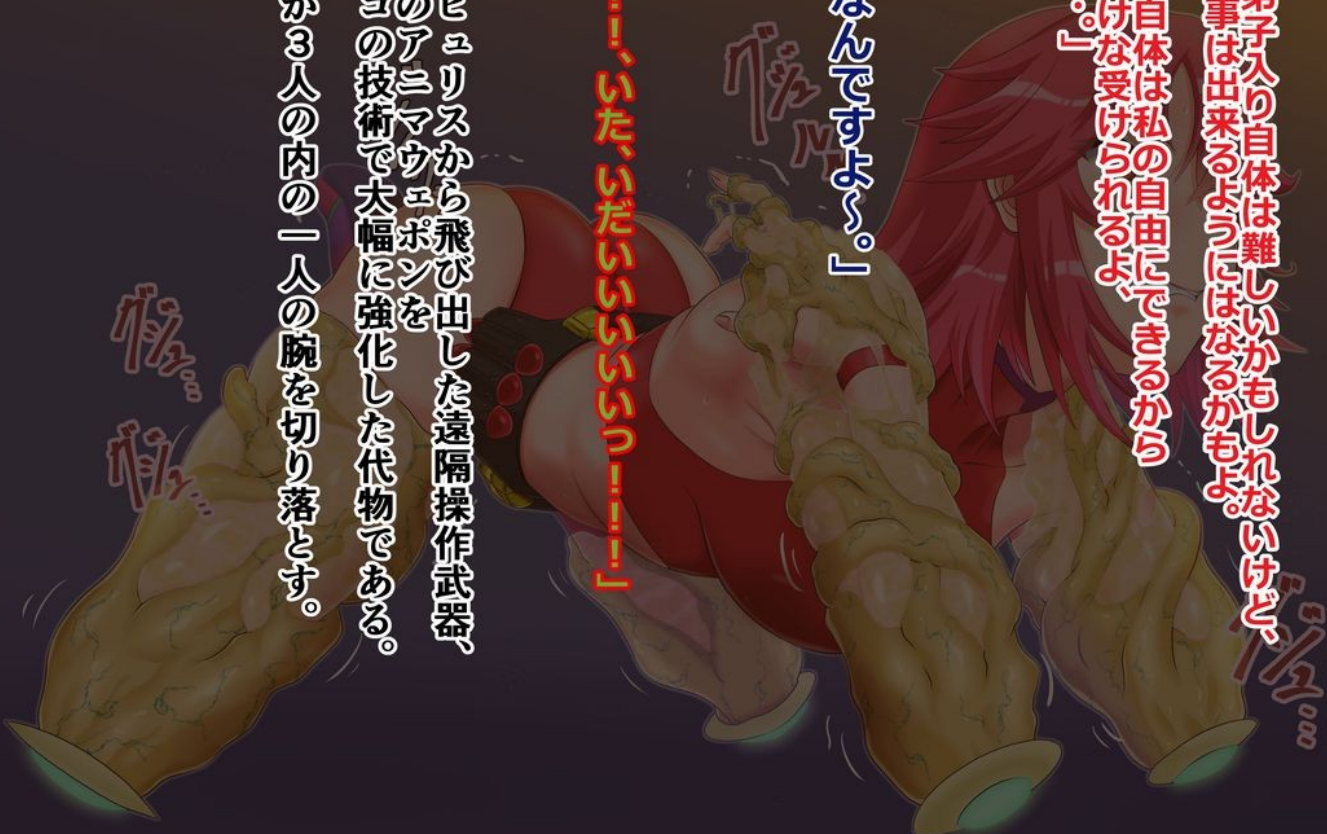
まあ試験自体は私の自由にできるから  
受けるだけな受けられるよ、  
だから……。」

「でも駄目なんですよ。」

「ういっういっ……、いた、いだいいいっ……！」

エラピュリスから飛び出した遠隔操作武器、  
彼女のアニマウエポンを  
マーゴの技術で大幅に強化した代物である。

それが3人の内の一人の腕を切り落とす。



「ちよつと！あなたっ！やめなさい！」

「あいつなんですよ……。わたくしね、あなたの事を尊敬していたんですよ、それでね、弟子入りの試験にも、行こうとしたんですよ、でもその日にね、事故にあつちやったんですよ。」

「それがなんの……！まさか……！」

「察しがよろしくて助かります、その事です、指示を出したのはこちら。」

続いてもう一人の腕が飛ぶ。

「アニメマウェポンを壊された事もありましてね、遠隔操作系のアニメマウェポソつて維持費が大変なんですよ、それをね、実戦形式の模擬戦だつて……勝負がついて、やめてついで泣き叫んでも許してもらえなくて……ねえ。」

最初に腕が飛んだ娘の残った腕が宙を舞う。次いでもう1人の両腕も無くなる……。そして……。

「駄目！」

2人の頭が宙を舞い、  
リーダーの娘の前に二つの頭が綺麗に転がり並んだ。

「ひっーひっーひっーあうっーあうっ。」

恐怖にひきつった彼女は過呼吸の様な状態になり、  
股間には彼女から生み出された水たまりが形成されていた。

「あら〜マーハンターの癖におもしろい〜、  
普通ありえないんじゃないか?」

マーゴハンターの技の中には  
体の内容を全てエネルギーに変換するという技がある。  
これはエネルギーをより多く確保するための技術であるが、  
マーゴという  
性的な攻撃をしてくる相手の前での粗相を防ぐという  
意味合いもある。  
非常に簡単な技術で、全てのマーゴハンターが  
初期に習う技術の一つである。

ただ体内の内容物を変換しても小水は溜まるもので、  
それでもエネルギーの制御が常にできているならば  
粗相などする事は無いはずなのだが、  
恐怖に屈したマーゴハンターはそれさえ出来ない  
状態という事なのだろう。



「そして、首謀者は「インツ」ですわね。」

「ふっふっふっ、おもしろいですねー！  
「おもしろいですねー！」

「ゲドゲド、何言ってるんだか分からないって。」

顔をグシャグシャにして  
言葉にならない許しを乞う娘の  
脛の半分から下が切断されあらぬ方向に転がる、

そしてあがる恐怖と痛みが入り混じる絶叫。

それを目を閉じ好きな音楽を楽しむように聞き入る  
エラピュリス。

「ふっふっふっ！おもしろいね！  
最高！これが聞きたかったのよ〜ケヒヒヒヒ〜！」

「あなた、もう止めなさい、もうこれ以上は私も養護できないわよ…。」

アイシヤが殺意の籠った厳しい眼差しで最終勧告をする。

「養護など必要ありませんわ、  
わたしはこいつらを苦しめて殺したかったんですよ、  
その為にマーゴの力を手に入れた、

でもそれで大正解♪。

目的の奴らも殺せるし憧れのあなたよりも強い力も手に入れた、  
マーゴハンターに戻る理由がないわね〜。」

エラピユリスの刃は娘の足を何度も往復し  
少しづつ輪切りにしていく  
悲鳴も酒れ果てたのか  
切られる度にヒッ、ヒッ、ヒッ、と声は出るがもうそれは  
反射のようなものだった。

「本当にこれしか方法が無かったの?。」

「勿論そうですよ。」

「じゃああなたはもう救えない、  
あなたは越えてはいけない一線を超えてしまった…  
…覚悟はできてるね。」

「覚悟?。」

そんな状態でどうされるんです…か?。」





エラピュリスの肩に残ったものが分離する。

それは各部分が展開しながらアイシヤの顔を覆いマスクのようになる。

そして光る足がワキヤワキヤと気味の悪い音を立てながら伸びる。

エラピュリスは鼻歌交じりに腰の巻貝のようなものの穴に手を入れ何かを物色する、巻貝は特殊な加工がされており見た目以上の物が入る。

程無くしてそこから出てきたのは太さ5cm、1m程の長さのチューブのようなものだった。

エラピュリスはアイシヤの顔に覆いかぶさったマスクに空いた穴にチューブを接続するとチューブはスルスルと穴に入り込んでいく。

「トヒ、最初はちよつと苦しいですけど、すぐに楽になりますよ。」

「今あなたの体の中に入ってきてるチューブはですね、中にたぐくつぷり特性の媚薬と淫気が詰まっていますね、体の中から快樂漬けにしちやうんですよ。」

ガク...  
ガク...

「はい、全部入りしました、  
あんなに長いものが入って苦しいですよね、  
でもそれもすぐに終わりますよ、ほら。」

アイシヤの体が  
先程までの異物を突きこまれる苦しさによる  
痙攣とは違う、物を突きこまれる苦しさによる  
快感を伴うピクン、ピクンという震えに  
切り替わり始める。

「ケヒヒ、乳首が固くなってきましたね。」

「薄くても衝撃にたいして丈夫に作られてるけど、  
内側からの影響が極端に出ちやうんですよね、  
特にあなたみたいな防御が高い人は薄いのを選ぶでしょうから  
ほら」  
「Gonna!」

言いながらアイシヤの乳首を優しいタッチで転がし弾く。  
その刺激にアイシヤの肢体は素直に反応してしまう。

ピクン

ピクン

その後も書く尻や背中、脇腹なども絶妙な加減で撫でまわされひとしきり弄ばれたアイシヤの身体はすっかり出上来上がってしまっていた。

「もうトロトロですね〜それでは仕上げましょうか〜。」

エラピュリスは再び巻貝を探り一本のパイプを取り出す。

「これはですね、わたし発案の特製でしてね、パイプ本体に淫気で作ったスライムを纏わせて、どんな相手のお○ンコにも相性バツチリ。」

で、これを突っ込まれてイっちゃうと中に込められる沢山の強力な淫呪がはじけてえ、すっごい事になるんですよ〜」

パイプをうっとり眺めながらエラピュリスはパイプの説明をする。

「いい出会いがありました、漸く完成したんですよ。」

でも使うなら特別な人が良いなと思ってたんですが、アイシヤさん、あなた程に相応しい方はいませんか〜、それでは〜

…あ。「あ。」

何を思ったのかパイプを巻貝にしまい込むエラピュリス。

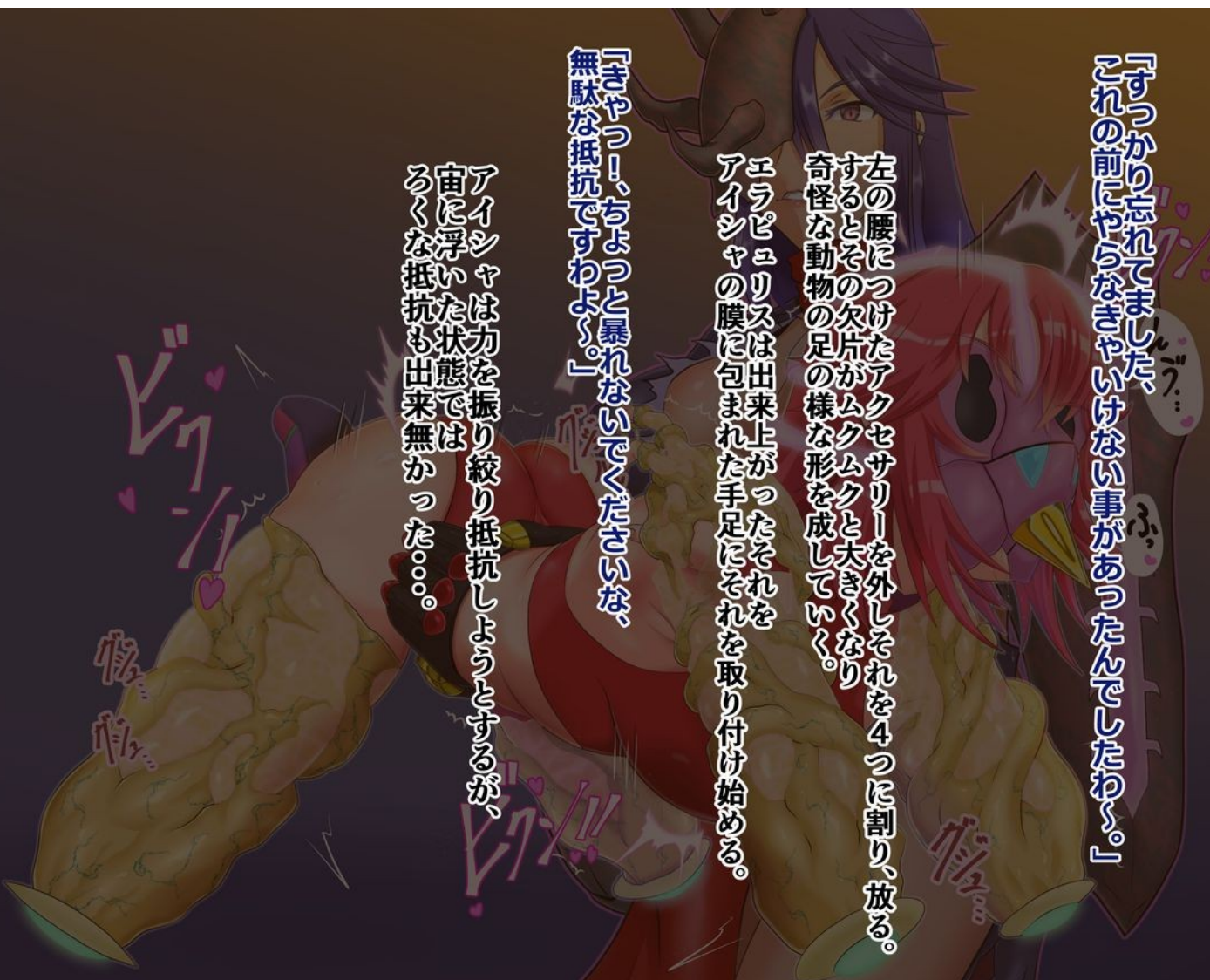
「すっかり忘れてました、  
これの前にやらなきゃいけない事があったんでしたわ。」

左の腰につけたアクセサリーを外しそれを4つに割り、放る。  
するとその欠片がムクムクと大きくなり  
奇怪な動物の足の様な形を成していく。

エラピュリスは出来上がったそれを  
アイシヤの膜に包まれた手足にそれを取り付け始める。

「ぎゃつ！、ちよつと暴れないでくださいな、  
無駄な抵抗ですわよ。」

アイシヤは力を振り絞り抵抗しようとするが、  
宙に浮いた状態では  
るくな抵抗も出来無かった。。。



アイシヤの手足に絡みついていた触手は  
膜の様に形状を変えアイシヤの肌張り付くと  
よりアイシヤの抵抗が弱まる。

浮き出た血管が青から赤に変わった時から  
何故かアイシヤの手足は先程までとは比較にならない程の  
脱力感に襲われ、薄く透ける箇所がある肉膜に対して  
指一本動かかせない状態にされてしまっていた。



その時である。



アイシヤの腰のメデューザが輝きだす、

よく見ると顔を覆っていたマスクの青く輝いていた部分の光が消えている、先程暴れた際に出たものだが、これによってマスクの機能が停止、

それによって集中力を取り戻したアイシヤは機能停止したメデューザを再起動、その内部に収納しているアイシヤのエネルギーを元に作った爆弾を排出し起爆する。

「ぎゃあっー!」

爆発により吹き飛ばされ壁に叩きつけられるが、すぐに体制を整えるエラピュリス、

その爆発に視線を向けると、炎の中から立ち上がるアイシャが目に入った。

手足を封印していた肉膜は爆発で焼け落ち、

赤い輝きが発せられた後、その手足にはアニメマウエポンが装備されていた。

（これは…マズイですね!。）

一瞬で危機的状况に追い込まれた事を察したエラピュリスの思考がフル回転し、この状況の打開策を検索し始める。

（そうだ！、あの女を盾にすれば！）

先程アイシヤを捕まえられたのも  
足手まといの3人がいたからこそだ、

ならばこの状況でも動かさず、  
しかし死んでいるわけでは無い奴を使えば、  
なんとか出来るだろう。  
エラピュリスは人生で最も憎んだ相手に  
初めて感謝の念を抱きながら  
娘の元に全速力で向かう。

目測で10歩も無い距離だ。

もう一度優位に立てればアイシヤを無力化できる  
道具はまだあるのだ。

後一步で手が届く、勝利はもう間近だ。

「同じ事をさせると思ってるの?。」

真横から聞こえるアイシヤの声、  
非常に近い距離から聞こえた声に、  
ついエラピュリスは横を向いてしまう。

その目に映ったのは眼前に迫る  
アイシヤの全力の拳だった。

「ごめん、クリステッ……。」

エラピュリスは何か言おうとしたが、  
その最後の言葉を言い終える事すら出来なかった――。



「はあ、しんどい。」

病院の入り口から出てきたアイシヤがため息交じりにそんな事を呟く。

予想外のトライゾンという相手との遭遇だったが、任務は完了した。

アイシヤは任務終了直後、重症を負った3人を全速力で専門の医療機関に運んだ。

幸い連れ添ったマーゴハンターの3人はなんとか一命をとりとめた、

完治には1か月以上掛かるが、マーゴハンターが持つ驚異的な回復力の成せる技という他ない、内二人は治療後すぐに意識を取り戻した程だ。

だが2人は意識を取り戻した瞬間周りの女性が全てエラピユリスに見えてしまうらしく、殆ど動けない体で必死にもがき泣き叫んで誰でもない方向を向いて許しを請い続けていた。

娘の両親も病院に駆けつけるがその状況に愕然としていた、

だが説明を受けると、娘の命を救ってくれたことをアイシヤに涙ながらに感謝した。

おそらく彼女達はマーゴハンターとして復帰することは難しいだろう、という話だった。

体が治っても精神が立ち直れなければマーゴとは戦えない。そうやって辞めていくマーゴハンターも毎年少なからずいるのである。

「せんぱーいー」

「？、レン？。」

娘達が意識を取り戻すまでに任務の報告と一通りの手続きを済ませ、病院から出てきたアイシヤを呼び止める声、その方を向くとそこにはレントがいた。

「どうしたの？こんな所に。」

「ちよつと近くに用事があったんですが、先輩が任務後に病院に入ったって聞いて来ちゃいました。」

大丈夫そうですが、どこか怪我を？。」

「いや、あたしは大丈夫、ありがとね。」

「もしかして、他の人が怪我したとかですか？。」

「うん、まあそんなと。」

アイシヤは多分そのうち話すとは思ったが、今はなんとなく具体的な話をする気が起きず、はぐらかして応える。

「RUNNER...か。」

「ほぐ。」

「レンって今人間関係での悩みってある？。」

「いざいざの事ですか。」

「まっなんとというか、  
いじめられてるとか嫌がらせにあっているとかさ。」

今回の任務で出会ったエラピュリスというトライゾンは、娘達に昔された事を苦にマーゴハンターを辞めたという、アイシャは具体的な事情を知らない、娘達がした行為を知ったら許せないと思うかもしれない。エラピュリスには早まる前に出来たことがあったのではないかと思うかもしれない。

マーゴハンターは常人を遙かに上回る力を持っている、

だが得た力をどう使うかは結局その者の人間性次第、そして大きな力を得たものの中には歪んだ人間性を強化してしまう場合がある。

なのでこういう話は当然いくつもあるし巻き込まれた事もある。

ちよつと過保護気味な気がするが、可愛い弟子にああなつては欲しくないという心境が生まれつい聞いてしまった。

「いざいざいじめというからみたいなのはちよつとあるかも。」

「えっ!?!」

アイシヤは一瞬ドキリとする、  
ああいった任務の直後だから  
よりそう感じたのかもしれないが、  
自分で出来る事ならば  
全力で力を貸してあげたい……。

「先輩との模擬戦とか訓練とかが  
最早いじめの域というか……。」

と置いていた2秒前の気持ちを返して欲しい――。

「そんな風に思ってたのがコノヤロウ。」

「嘘!、うそですよ!。  
そんな風に思ってた事なんて無いですって。」

でもそういう事があつたら自分で頑張つて解決しますよ!。」

「まったく……。  
でも、そういう事があつたら  
抱え込まずあたしとかに頼りなよ。」

「わかりました、  
ギリギリまで頑張つて駄目だったら頼ります。」

「頼むからその2歩手前くらいで相談して、  
頑張り過ぎも良くないぞ。」

「はーん。」

レントの性格的に  
そうなる前に相談できるとは信じているが、  
世の中には問題をギリギリまで放置し、  
取り返しの付かない状態まで放置する人もいたり、  
酷い場合は  
他者に責任を押し付け逃げたがる輩もいる。

そういうった問題は  
時に一人ではどうにもならない時があり、  
アイシヤも過去にあったトラブルでは  
他の人にも助けを  
良い方向に解決した経験があるが  
自分の場合は早めに相談してくれた方が  
対応もしやすいので、そういう意味でも  
ちよつとだけレントに釘を刺しておく。

「そういえば、なんかお腹すいたな、レンは済ませちゃった?。」

時刻は正午過ぎ、  
そういえば、  
昨夜から何も食べていなかったの  
で空腹だった。

「いえ、まだです。」

「じゃあなんか食べて帰ろうか、何にする?。」

「あ、ちよつと気になってるお店があるんで  
そこにしましょうよ。」

レントは食べもの関連は日々色々調べていて、  
しかもアイシャと味の好み  
が似ている事もあり  
あまり外す事も無いのだ。

「55よ、じゃあいっか。」

「はー。」

このちよつと鬱屈とした気分を  
晴らせるような店だ  
といいな。

でもたまにレンは  
冒険気味な店を選ぶ事もあるんだよな、  
まあそれはそれで  
楽しめればいいや、

そんな事を思いながら、  
アイシャはレントと他愛無い話をしながら  
店へと向かうのだった。

# エラピュリス

トライゾンと呼ばれる  
マーゴハンターを辞めた者が後に  
マーゴと手を組み、  
人間に仇なす存在となった  
マーゴハンター。

マーゴハンターだった時は  
クラス2だったが  
クラス3に上がれず  
辞めたとされているが  
それにはある事情があるらしい。

遠隔操作系のアニマウェポンを持ち、  
それにマーゴの技術を  
掛け合わせ強化した武器と  
様々な道具を用いる戦法を  
得意としている。

特に左肩の盾の遠隔武器は  
敵を倒す事よりも捕獲、無力化する  
為の装備が多数仕込まれている。

下級マーゴの時に出会い、  
妹として上級マーゴにまで育て上げた  
クリステッラというマーゴがいるらしい。

